

# 環業革命——環境を軸に据えた新産業創出を

山根一眞 (ノンフィクション作家)

聞き手／高橋孝輝 (サイエンス・ライター)

## 「植物学者」になりたかった

—— 「メタルカラー」の山根さんが、一方では長く「アマゾンの環境問題」などに取り組まれている。少し意外でした。

**山根** その原点は、僕が子ども時代に植物学者になりたかったということにあるんです。こんなこと言うのは初めてですが、子どもの頃、僕は、新聞記者か植物学者かタクシーの運転手さんになりたかった(笑)。新聞記者については、僕はやっぱり昔から取材して文章にまとめることが好きで、小学生時代には学級新聞委員になり「ガリ版新聞」を作っていました。「ガリ版」ってわかります？

原紙と呼ぶ大きな油紙を鉄のヤスリ板に載せ、鉄筆でガリガリと書いて、謄写版印刷機で印刷するという簡易印刷。当時は全部それだったのです。で、校内ドッジボール大会などでは、校庭にガリ版の鉄板を置いて原紙を載せ、寝転がって試合を見ながらいきなり記事を書いたこともありました。試合終了と同時に職員室に走って行き特急で印刷してもらい、



全校生徒が下校する前には号外として配るんです。

—— インターネットのない時代から、ノートPCで原稿を書いては送信する「モバイラー」の原点は、校庭でのガリ版切りにあったというわけですか。

**山根** そう、今やっていることとほとんど変わらない(笑)。植物学者になり

たかったのは、自然が好きだったからなんでしょうね。当時は特に植物が好きで、「日本の植物学の父」と呼ばれる牧野富太郎を尊敬していたんです。中学生になると古生物である「化石」や、「地質」「鉱物」に興味に移った。中学の理科の先生の影響です。おかげで中学時代に関東の山はかなり歩きました。地質への興味は

後に宮沢賢治にも重なるんです。

—— そう言えば読売新聞の「名作を読みたい」で、山根さんは宮沢賢治の『グスコブドリの伝記』を取り上げていました。

**山根** そう、冷害と干ばつで両親を失い、妹とも離別した若い気候学者グスコブドリが、科学の力で迫り来る冷害を防ごうと闘う物語です。火山を人工的に噴火させ、排出する二酸化炭素で地球を温めようという「大作戦」。そんな発想を80年前に持っていたところがすごい。そういうわけで、少年時代から無線通信やら化学、天文など科学分野は何でも好きだったんですが、植物をはじめとする生物、さらに生物を含む生態や環境に強い関心を持つようになったのは1972年、24歳で初めてアマゾンに行ってからですね。

## アマゾンとの出会い

—— 1972年というと、もうプロのライターとして活動しはじめていますよね。

**山根** 週刊誌などのフリーライターだったんですが、こんな話が飛び込んできました。「海上自衛隊の練習艦隊が1年に1度世界を回るが、今回はブラジルに行く。ブラジルには日系人が多く自衛艦隊の来訪を心待ちにしている。ついてはその航海に同行し、航海記事を寄港する港、港から、サンパウロの日系新聞に送り続けてくれないか」と。

—— おもしろそうですが、時間はかかりそうですね……。

**山根** 期間は3か月。ギャラはゼロで片道キップのみ。貯金は当時5万円しかなかったのですが、「これはおもしろそうだ」と友人から借金をして、1972年6月22日、横須賀を出航しました。実はその自衛艦内でも、勝手にアングラ新聞を発行して物議をかもしたり……。

—— “三つ児の魂”というやつ(笑)。

**山根** その頃は当然デジカメもないですからニコンFでフィルム写真を撮り、艦内で自分で現像。各地で寄港するたびに、書きためた記事とネガフィルムをブラジルへエアメールで送る。ものすごい量の記事を書きましたよ。こうして3か月後、サントス港に着いたら埠頭はじまって以来の人、約2万人の出迎えを受けました。皆、航海記を読んでくれた人たちで、おかげで僕はブラジルで一気に有名人になっちゃった。後でポリアに行ったときも、「おまえは自衛隊の船で来た記者だろう」と、よく言われました。その日系新聞は、ブラジルに限らず南米100万の日系人社会で、よく読まれていたからなんですよ。

—— 気がついたら、南米の日系人の間でスターになっていた。

**山根** でも日本に帰るお金はなかった。それでどうせなら南米を回ってみようと、カバンひとつで陸路3,800kmの果てのアマゾンにたどり着いた。そこで25歳の誕生日を迎えたんです。アマゾンでは、たくさんの方たちと知り合いになり、開拓の先人から不思議な動物や植物、鉱物の話をたくさん聞かせてもらいました。何よりも圧倒的で、人間を打ちのめすような、陶酔させる熱帯雨林の大自然に初めて出会い、価値観も人生観も激変しましたね。



高橋孝輝氏

## 人々の暮らしから「環境」を考える

—— そ、そんなにアマゾンの自然というのは、すごいものだったんですか。

**山根** まずね、なにもない(笑)。ここ東京には何でもあるじゃないですか、情報だろうが物だろうが。でも、当時のアマゾンには、道路もなければ電力もテレビもなかった。当時は、河口の大都市ベレンでさえスーパーマーケットすらなく、大ナマズをごろんと売っている市場が最大のショッピングセンターですから、奥地へ行けばそれは壮絶なものでした。

—— すごいですね。

**山根** それから今まで、アマゾンには16～17回は行っているかな。一度行くと1か月から3か月はいるので、どうしても連載原稿などの仕事を抱えて行く。最初のうちは手書き原稿を、いかにして「郵便」で日本へ送るかが大苦勞でしたよ。90年代に入ってからインマルサット衛星にアクセスする大きな衛星通信装置一式を持って行ったり。今はアマゾンでも、携帯電話やインターネットが使える時代になりましたけどね。そうして通い続けているうちに、1996年、アマゾンで最初の国際環境シンポジウムを僕が主催することになったんです。

—— その業績に対して翌1997年に「アマゾン・パラ州議会功労賞」を受賞されることになったシンポジウムですね。

**山根** なぜこのシンポジウムを企画したかという、先進国の言う「アマゾンの環境問題」は、単に「アマゾンの森の木を切るな」ばかりだったからです。これは日本の道路問題と同じで、要するに「悪い」「やめろ」のゴリ押ししかしない。木を切り、畑を作り、生活している零細農業者のことを考えていないんです。でもね、アマゾンとはいえ約1,500万人が住んでいる。森林を利用して何百年と生きてきた彼らが、急にそれまでのライフ

スタイルをやめたらどうすればいいのか。その先のことをだれも考えてあげていない。そこで、熱帯雨林や野生の稀少生物を守りながら、彼らの生活が成り立つ道を探るために、幅広く専門家を集めて議論をしなければと思ったんです。

—— なるほど。

**山根** それから1992年にリオデジャネイロで開催された国連環境サミット。その後の世界の環境意識の高まりの原点ともなった会議ですが、その118か国が参加したサミットになんと日本は欠席した。こんな恥ずかしいことはない。そこで、僕の「第二の故郷」であるアマゾンで、日本の役割も伝える会議を開催したいと思ったんです。日本や国連からもパネラーを呼び、NHKテレビでの特別番組にもなったんですが、2日間で約16時間、6本のシンポジウムを一人で司会して、最後にはまったく声が出なくなりましたよ。

## 「環業革命」という発想

—— そのアマゾンから、山根さんは「環境」に向かうことになった。

**山根** 動物とか植物、鉱物はもとより、あまねく「自然界」を含めた「環境」ですね。自然界にあるものが失われていくのは、人間の傲慢の故じゃないかと思ったんです。それと、90年代半ばから新潮社の『SINRA』というネーチャー雑誌で、絶滅したニホンオオカミと絶滅に瀕するイリオモテヤマネコをテーマに、合計4年半ほど連載したことも大きかったと思います。沖縄県の西表島は“日本のミニアマゾン”といわれている素晴らしい島ですよ。その後、あのシンポジウムの母体となったNGO組織「アマゾン未来協会」の手で、密林内にイリオモテヤマネコの遠隔観察装置を設置しました。ヤマネコの生態が、衛星経由で琉球大学の生態学研究室に届くシステムです。情報通



山根一眞氏

信技術は単に便利で楽しいだけではいけない。こういう切羽詰まった自然保護のためにも活用しなければと……。

—— なるほど。そこでモバイラーの山根さんと、イリオモテヤマネコが結びつく。

**山根** 自分がこの30年あまり首をつっこんできたさまざまな分野が、「環境」で一つに結びついてきたんです。一方で、ニホンオオカミ絶滅の謎を解く2年あまりの世界各国の取材を通じて、人間と自然界との厳しい課題も見えてきた。イリオモテヤマネコも同じ、アマゾンもやはり。野生動物を知ることは、環境問題をより深く知ることなんです。

—— どういう点で？

**山根** たとえば、奥日光や奥多摩では野生のシカが増えすぎています。樹皮をかじるのでハゲ山になってしまったところもあり、こういう自然破壊が野生動物によって広がっている。では、野生のシカはなぜ増えたのか。温暖化で厳寒の冬に死ぬ個体が少なくなったからなんです。

では温暖化はなぜ起きたのか。社会の工業化です。その原点は化石燃料を大量に消費しはじめた18世紀の産業革命。野生生物の問題から環境問題へ、そして産業革命という現代文明の原点に突き当たったわけです。

—— 壮大な視野の広がりですね。

**山根** それで僕はこの数年、アマゾンよりヨーロッパの産業革命の史跡を訪ね歩くことが多くなりました。産業革命は我々の文明、モノ作りの原点であり、「メタルカラー」というライフワークの原点でもある。地球環境を破綻させつつある文明の原点と発展の道筋を、この目で見続けようと考えたんです。2001年に「鉄」に焦点を絞り、鉄の史跡を訪ねて世界一周したのもそのためです。前回にニューヨークのブルックリン橋や明石海峡大橋についてお話したことは、そういう一連の取材の成果でした。で、そうやって工業社会の歩みを見てくると、今直面している環境問題を克服するには、環境を基軸とした新たな「産業革命」を起こす

べきだと考えるようになったんです。

—— 新しい産業革命。環境を踏まえた新産業の創出という「環業革命」論ですね。

**山根** たとえば、前回お話したような「自動車の車幅を変えることを前提にした道路の建設」や「路面全ての太陽電池化」といった高度の環境技術が育てば、きわめて大きな産業が発展しますよね。「環業革命」という言葉は1997年、NHKの『未来派宣言』という番組の中で初めて使いました。未来志向の活動を始めている人々にスポットを当てる名古屋発の番組だったんですが、その中で、トヨタ自動車が開発中の燃料電池カーをスタジオに持ってきて、初めて公開したことがありました。燃料電池は水素と空気中の酸素を反応させ電気を得る装置で、廃棄物は「水」だけというエコ発電システムです。『未来派宣言』では、毎回番組の終わりに僕がその日のテーマを「キーワード」にして書いてたんですが、その燃料電池車を見て、「環業革命」という言葉がひらめいた。環境による産業革命、同時に「リサイクル＝環」による産業革命」という意味合いも込めています。

## 夢の効用

**山根** この「環業革命」という考え方は、3月25日開幕の愛知万博で、僕が総合プロデューサーを務める長久手愛知県館のテーマにも採用されました。少し離れた瀬戸会場のほうの愛知県館のテーマは「生物の多様性」です。これまでお話した、「次の産業革命は環境で起こさねばならない」、そして「野生生物の多様性を守らねばならない」という、僕自身の2つのこだわりをふまえて構成したわけです。長久手愛知県館の「産業発展の未来絵巻」、瀬戸愛知県館のライデン自然史博物館から借りた「ニホンオオカミのタイプ標本（シーボルトが持ち帰り学名がつけられた原標本）」をはじめ、い

ろいろ驚くようなものが見られますよ。

—— 環業革命ということでは、これからどんな活動をお考えですか？

**山根** 今までと同じように書き続けること、語り続けることだと思っています。ここ数年の「メタルカラー」や他の連載

でも、環境関連技術を取り上げることが増えていますが、この10年間見聞き考えてきたことの集大成として、近々『環業革命』という本が出ます。また、ニホンオオカミの連載をまとめたノンフィクションも出ます。去年は猛暑に集中豪雨、空前の数の台風と記録的な異常気象に見舞われましたけれど、それらの現場にもかなり出かけて取材を続けています。環境問題は災害問題になってきたわけです。新潟県中越大地震やインド洋津波も、大きくみれば地球の環境問題です。こちらでも必死に取り組んでいます。そろそろ次の時代を担う人たちを集めて、「環業革命」を進めていくための具体的な活動を起こしたいとも考えています。

—— 「環業革命」という視座からいうと、ITSについてはどうでしょう？

**山根** それはもう必須条件です。僕はITSの会合で何度か基調講演をさせていただいていますが、ITSの全体像は一般の方にはわかりにくいですね。やっとETCが普及してきたところですが、まず50年先、100年先のビジョンを示さないといけないと思います。で、そういうビジョンを提出するのは、必ずしも技術者でなくてもいい。イギリスのSF作家のアーサー・C・クラークは、1945年に「衛星通信ネットワーク」を予言し、それが実現したでしょう。だから僕のような文化系の人間でも、ドンドン



言わせてもらってもいいんだと思っているんです。「ビジョン」では分かりにくければ、「夢を語る」でもいい。ITSに限らず、50年後、100年後の技術の夢を設定することです。そうすると、その実現のための要素技術とは何なのか、人のありようはどうあるべきなのか、今後の文明の望ましい姿は——など、これから取り組むべき課題が見えてくる。そういうビジョン、夢がなければ、どんな計画も事業も前には進めないと僕は思いますね。今の道路に関する事業や計画は、過去の問題の後始末と戻ぬぐいばかりでしょう。時代が移れば、以前の目標や組織は当然変えていかなければいけないわけですが、だからといって過去と現在の視点しか持たず未来へのビジョンがない、いわゆる「葬式論」だけに引きずられてもいけないと僕は思う。道路と自動車は大きな時代の課題である「環境」と表裏一体です。その環境を基軸にした産業革命＝環業革命を起こさねばならない時なんですから、道路と自動車のまったく新しい大産業へのビジョン作りをしなくちゃ、子孫に申し訳ない。そのため、ビジョンを僕も語り続ける決意です。

—— 壮大で夢いっぱいのお話、ありがとうございました。

(やまね・かづま)

(たかはし・こうき)

撮影／円山幸志